

熊本県
人吉市

ゲストハウス ピルミレンゲ 代表
伊奈 祐司さん <31才>



決め手は人吉の自然
そして、人の温かさ
球磨川の流れを望む地で、夢だった宿を開業



多くの経験を積んで、夢を叶える定住の地へ

『ピルミレンゲ』とは、ヒンディー語で『また会いましょう』という意味です。学生時代、バックパック一つを背負ってアジア諸国を旅した伊奈祐司さん。インド少年から教えてもらったこの言葉が、3年前に人吉で開業した宿の名前となりました。「アジアで経験したのは、安宿に泊まり、見ず知らずで、年齢や好み、そこに来るまでの経緯も全然違う人たちと出会う刺激や心地よさ。それが楽しくて、日本でもそんな経験ができる宿を作ろうと思ったんです」

愛知県出身で広島大学の大学を卒業。サラリーマン生活を経て、宿を開業した時、「売りになる能力や経験を身につけるため」、ラフティングガイドや大工見習い、漁師生活の3年間を過ごした伊奈さん。宿を開く場所として人吉を選ぶ決定打となったのは、「ラフティングで人吉と出会って、大好きな市房山や球磨川があること。そして、親切にしてくださいました人との出会いや土地の温かい雰囲気でした」

との間じゃわかりません。移住には、「そこにずっと住む」という気概が必要だと思います」と伊奈さん。宿開業の前に結婚を決めたのも、「宿がうまくいくかどうかかわからず、彼女の両親を説得する自信がなかったら、どのみち宿だつてうまくいかない」という、厳しくも愛情あるお父さんのひと言が後押ししてくれたから。「不安はありましたが、なんとかなると思いました」と妻のくみさん。膝の上では、1歳になる息子の耕ノ介くんがニコニコと笑っています。「ここは、知らない高校生でも、すれ違う時に挨拶してくれるような土地。子育てにはいい場所ですよ」。大自然に囲まれながらも、「結構都会」なんて不慣れは感じません」と2人で声を合わせます。地元の人々が貸してくれる畑で作る野菜が宿泊客の食卓に並び、庭には、その日近所の人が持ってきてくれたという桜の木が置かれていました。「ほだ木にしたいの菌を打つやり方も教えてもらいました。ここにいる人との触れ合いに感謝することが多いです」。恩返しは、「地域の人が誇りに思ってくれる宿になること」。それが、伊奈さんご夫妻が抱く共通の思いです。

人との縁で実現した、こだわりの塩屋

しょっぱい中にほんのり甘く、ちよつぱり辛い。「天草塩の会」の天然塩「小さな海」は、昔ながらの塩田の製法で海水を汲み上げて手作りされる天然塩。緑に囲まれ、波音が聞こえる海岸近くの丘に、「小さな海」の生みの親・松本さんの塩工房は建っています。

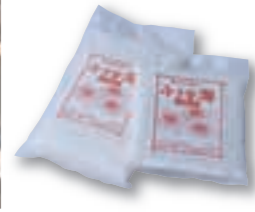
「なんととっても海水がきれいや。珊瑚がいて、この海岸に海がめも卵を産みにやってくる。天草は橋で陸続きだから輸送もしやすくて最高」という松本さん。「食は生きることの原点」と、20代から玄米食に目覚め、水と塩の大切さを実感。それならば生きていくのに欠かせない塩を作ろうと、37歳で退職後、伊豆の塩田に修行に。その後、福岡出身の妻の恵さんと二人で、塩作りに適した土地を探して全国を巡りました。

なかなか条件にあった土地が見つからない中、熊本出身の知人の勧めで来熊。国立公園に指定される美しい海に惚れ、天草での塩作りを決意しました。工房の建物などはすべて夫婦二人の手作りでスタート。塩の大切さを知る地元のかまぼこ店、味噌蔵などの協力で、「天草塩の

人の心とアートに触れ合う毎日

そんな松本さんの塩工房を週に数回手伝いにやってくるのが、東京出身の加藤笑平さん。「世代を超えて人の心をつなぎたい」と天草の御所浦で開催される伝馬船のワークショップなどに参加するうちに、インスピレーション溢れる熊本の自然に魅了され、「住まなきゃ何もわからなから」と移住してきました。知人に紹介された松本さんと意気投合し、今では週に数回、片道1時間近くかけて塩工房に通っています。

ご自身でも油絵などを描く加藤さんは「天草地区には美術館がないんです。地元にもいい作品があるのに、見せる機会も地域の人が見る機会もない」と、自宅兼アトリエの一部を「天草在郷美術館」として開放。陶芸家である妻の裕子さんと企画展などを開催し、人々の交流の場前にもなっています。美術館前の道を行くおじいちゃんやトラックから声をかけてくれたり、土地のものを分けてくれたりする。そんなふれあいある温かな生活が、すべての人に「故郷」を感じさせる田舎ならではの魅力です。



天草塩の会 代表
松本 明生さん <59才>

東京

熊本県
天草市



天草在郷美術館 代表
加藤 笑平さん
<25才>

東京

熊本県
天草市

天草の海にほれこんだ二人の職人たち

天然塩とアートが生んだ地域と人の交流